

歴教協第62回愛知大会速報

全国から829名が参加。第62回大会を成功させる

●全体会は愛知のパワーで盛況！

7月31日から歴教協の第62回大会が愛知県の南山高等・中学校を中心に行われた。

「現在（いま）を見つめ、歴史に学び平和な世界を」という大会テーマのもと、「歴史に学び、生きる希望が持てる社会科をともに創ろう」という江連恭弘常任委員の基調提案がなされた。歴教協がこれからの社会の希望を語り、教師としての自信を取り戻せる場としての意義を見出し、この大会をこれからの実りある豊かな実践につなげる機会にしていくことが提起された。

現地の速報は『あゆちの風』と命名され、学校近辺のグルメスポット情報をはじめ、非常に内容の濃い紙面作りがなされていた。

全体会の地域実践報告は「地域と子ども」と題して愛知の豊かな教育実践が報告された。「花祭り」の踊りの披露から始まり、地域の方々と有意義な協力をしながら実践を積み重ねている小学校の青年教師からの実践報告がなされた。



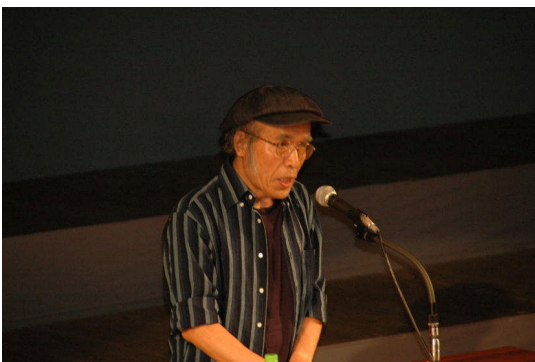
「花祭り」を踊る中学生のみんな



「ぞうれっしゃがやってきた」を歌う子どもたち

続いて、文化行事として合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」の大合唱が行われた。やはり、実際に目の前で直接見るのは非常に圧巻である。

記念講演は安川寿之輔氏により「『韓国併合・大逆事件』100年と『坂の上の雲』」と題して丸山眞男の福沢諭吉像に関する講演が行われた。



講演を行う安川寿之輔氏

当日「ぞうれっしゃ」の合唱に参加した中学生からは、「ぞう列車が広まったこの歴教協の舞台でぞう列車がうたえて本当に嬉しいです。ぞうれっしゃの歴史も長く、その歴史のレールにのれて、生きていてよかったーと思います。今回の歴教協大会で、歌い手の方、客席にいた方、伴奏をして下さった方、パフォーマンスをして下さった方など一つの舞台をつくりあげることができたことは私の自信ともなりました」という大変前向きなコメントが寄せられた。

参加者からも「私の学校でも、ぞうれっしゃの合唱をやったことがあります、愛知で聞けたことに感激しています。子どもたち大人の人々と力を合わせて一つの合唱をつくりあげておられるのが素晴らしいと思いました」という感想が寄せられた。



記念講演についても「安川先生の講義は、私の長年にわたる疑問をスパッと解決してくれました。福沢諭吉への疑問を持ち続けながらどう解明したらよいのか、仕事に追われ、そのままでした。今日の講義で学びへの意欲が復活しました。」という声が寄せられており、非常に有意義な全体会であったことが垣間見られる。

- 地域に学ぶつどい...約 378 名が参加

全体会終了後は「地域に学ぶつどい」が全体会場でもあった「名古屋市公会堂」を会場に行われた。14 のテーマ学習会に約 378 名の方が参加された。秀吉の実像についての講座から、学校における非正規の雇用の問題、トヨタ労働の異常性と家族の苦悩という問題まで、非常に多彩な分科会が用意されていた。以下は、参加者の感想である。

「特に強い関心で来た訳ではなかったけれど、まさに目から鱗でした。秀吉伝説を通して観る日本の近現代、是非授業に取り入れたいと思います。」（郷土の英雄秀吉の実像）

「今の状況の高校生の実態を改めて知った。この昨今の不況により学費の払えない同志が増えているのは知っていたのですがデータによる実態を見てみると自分はまだ幸福な方なのではないだろうかと思った。自分は一億円募金には参加した事がないが機会があれば参加したいなと思った。」（未来をみつめ行動する高校生）

「今日は、内野さんご本人から直接お話を聞くことができ大変感動して涙ぐむ自分がいた。世界のトヨタ（国・労基署）を相手に今も今も戦い続ける彼女の姿に勇気づけられる内容であった。

彼女が言われたように過労死のない社会をつくっていきたいと思うことであった。」（トヨタ労働の異常性と家族の苦悩）

- 多くの充実した実践が報告される

分科会は南山高等・中学校を会場にして行われた。優れた実践に対して熱い議論が交わされた。分科会の感想からその一端を紹介する。

- ・ 第 7 分科会 現代の課題と教育の参加者

初めての参加です。農漁村部と都市部と変わらず、教育を支える基盤が崩壊しつつある実態に驚かされました。その中で、子どもたちとともに、パワフルに取り組まれている実践に勇気をもらいました。

- ・ 第 11 分科会 小学校 3 年生の参加者

初めての 3 年担任で、いろいろ悩みながらの一学期でした。午前中に提案されたレポートで、いろいろ疑問に思っていたことが少し分かってきてよかった。これから参考にしたいと思います。



・第 17 分科会 中学歴史の参加者

こちらの分科会に参加させていただきました。午前は中学の最終授業をどうしめくくるかをめぐって「戦争と平和」を共通にとりあげられた実践をうかがいました。生徒とのやり取りがていねいに取り上げられていて、苦しい条件の中での実践にもかかわらず、「すごい！」と思いました。また、討論の課程で、生徒に、中学最後に自分の意見を持たせるというだけではなく、どういう事実への理解を深めさせるのか？授業者がどういう生徒の認識の深まりを手伝えるのか？考えさせられました。

●福岡大会へ向けて

今年度の全体討議は、前半で君島副委員長より「歴史教育から問う韓国併合」と題して特別報告を行っていただき、後半はその内容を受けての討議が行われた。

全体討議では、報告の内容を受けながらも、各分科会での討議の様子や、各地でのこの間の取り組みについての報告がなされ、参加者の協力により、学習の場や貴重な情報交流の場とすることが出来た。次年度以降もさらに活発な討論が行われることを期待したい。

閉会行事では、小出現地実行委員長から名古屋の言葉を交えながら、非常に心温まる挨拶をいただいた。また、現地実行委員の方々からコメントもいただき、改めて現地実行委員会の奮闘により 62 回大会が行われたことを実感させられた。愛知の実行委員会の方々に感謝申し上げたい。次年度、第 63 回大会は福岡大会である。恒例の「引継ぎ」が行われ、大会は愛知から福岡へ引き継がれた。次年度もさらに充実した大会にするためにも今回学んだことを各職場で実践し、来年の大会で報告していきたいものである。

（文責：大会委員会）